

# 自ら学び、考え、表現できる子どもの育成 ～言語力を高める授業の在り方～

旭川市立永山小学校  
学級数 26  
(校長 森谷 一夫)

## 主題設定の理由

学校教育においては、社会の急激な変化によって生じる様々な問題に適切に対応できるよう、基礎的・基本的な知識・技能はもとより、学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力等を含めた「確かな学力」の育成に努めることが求められている。中でも、平成20年改訂の新学習指導要領では、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から言語活動の充実が重点となっている。

本校では、平成17年度から3年間、「自ら進んで学び、ともに高め合う子供の育成」を目指し、主に国語科において、伝え合う力の指導に重点を置き、授業改善を進めてきた。平成20年度からは、学ぶ意欲の向上を図りながら、思考力・判断力・表現力等をはぐくむことができる学習過程や授業展開の改善を図るため、言語力の向上に重点を置き、本研究主題及び副主題を設定した。

## 研究の全体構造

学校の教育目標  
心豊かな子をめざして  
考える子 助け合う子 元気な子 《合言葉》風の子のように きらきら いきいき

研究主題  
自ら学び、考え、表現できる子どもの育成  
～言語力を高める授業の在り方～

目指す子ども像

- ・基本的な学習習慣や生活習慣を身に付け、意欲的に学習に取り組む子 [ 学 習 意 欲 ]
- ・自ら課題を見付け、解決に向けて粘り強く取り組む子 [ 課 題 解 決 力 ]
- ・自分の思いや考えをまとめ、豊かに表現することができる子 [ 活 用 力 ]
- ・授業で習得した知識・技能を学校生活や日常生活で活用できる子 [ 表 現 力 ]

研究の仮説 基本的な学習習慣や生活習慣を身に付け、学習指導において、学習意欲を喚起し、言語力を高める学習活動を展開することで、論理的に考えながら課題解決に取り組み、自分の考えを適切に表現できる子どもを育てることができるであろう。

**研究の具体仮説 1**  
国語科において、学習意欲を喚起し、言語力を高めることができるよう指導計画を工夫することで、基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、意欲的に課題解決に取り組む子を育てることができるであろう。

**研究の具体仮説 2**  
国語科において、論理的に考えながら課題解決できるよう言語力を高める授業を展開することで、根拠を明確にしなが筋道を立て、自分の考えを表現することができる子を育てることができるであろう。

**研究の具体仮説 3**  
一人一人の学習状況を的確に捉え、自己評価・相互評価の工夫に努めることにより、自他の変容や成長に気付き、学習への有用感をもつ子を育てることができるであろう。

**研究内容 1**  
基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る指導計画  
・基礎的・基本的な知識・技能の明確化  
・問題解決的な学習過程の構築  
・教材分析に基づいた指導計画の工夫  
・指導目標・指導内容の具体化

**研究内容 2**  
思考力・判断力・表現力を高める授業展開  
・論理的思考を促す学習課題の設定  
・集団思考の焦点化・深化を促す発問の工夫  
・一人一人の考えを表現する場の工夫

**研究内容 3**  
指導と評価の一体化  
・領域別年間指導計画に基づいた観点別評価の充実  
・学習過程の応じた評価の工夫  
・個に応じた指導と評価の工夫  
・自己評価・相互評価の工夫

日常的な読書活動・支持的風土のある学級経営  
基本的な生活習慣・学習習慣の定着

## 研究実践の概要

### 1 言語力を高める授業について

#### (1) 言語力のおさえ

言語力は、全ての学習活動の基盤である。言語力の育成は、全ての教科・領域等において担われるものではあるが、その中核となる教科は、国語科である。

言語力については、「言語力の育成方策についての報告書」（文部科学省 言語力育成協力者会議まとめ）によれば、以下のとおり定義されている。

言語力は、知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とのコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力を意味するものとする。

本校では、上記の定義を踏まえ、言語力を語彙力、言語技術、言語感覚などの総体と捉え、国語科「読むこと」を中心に、言語力を高める授業の在り方について研究を進めている。

#### (2) 「永小型読解力」について

説明的な文章や文学的文章を読み取っていくためには共通のものさし（分析項目）による分析が必要である。このものさしがなければ、単なる遊びの延長上である活動や気持ちばかりを問う授業に陥ってしまう。しかし、共通のものさしを用いた教材分析を進めることにより、一つの教材だけにとどまらず、他の教材における読み取りにも生かすことができる。そして、このものさしに基づいて読み取る時に、子どもたちの根拠となるものが、教材文に書かれている言語である。

本校では、教材文を読み取るために必要な3つの読解力（教材の全体構造を読み取る力、教材の特徴を読み取る力、教材の本質を読み取る力）を「永小型読解力」として独自に定義し、それらを読み取りながら言語力を高めていく授業（「永小型読解力」の授業）の実践を進めている。「永小型読解力」の授業は、この3つの読解力を基に、教師が共通のものさしを用いて行う教材分析である。教師が教材分析を行うことで、教材の特性をつかみ、それらを基に指導計画を工夫することができる。そうすることで、指導書に頼らない独自の指導計画を作成することができるのである。

### 教材の全体構造を読み取る力

説明的な文章	三部構成で場面を分ける。 問いと答えを対応させる。
文学的文章	起承転結で場面を分ける。 基本設定（人・時・場所）を考える。

### 教材の特徴を読み取る力

説明的な文章	段落ごとに要約する。 接続詞、段落相互の関係を考える。 文章構成図にまとめる。
文学的文章	表現技法を見付ける。 人物、情景描写を考える。 クライマックスを見付ける。

### 教材の本質を読み取る力

説明的な文章	筆者の主張や工夫を捉えながら、自分の考えをもつ。
文学的文章	作品全体をふりかえり、主題について自分の考えをまとめる。

#### 説明的な文章の分析項目

- 題名・筆者
- 基本構成
- ・問いの段落（文）と答えの段落（文）の対応
- ・三部構成による場面分け
- 内容検討
- ・段落ごとの要約
- 文章構成
- ・接続詞
- ・段落相互の関連
- ・文章構成図
- 作品分析
- ・筆者の主張
- ・筆者の工夫点（表記・論の組み立て）

#### 文学的文章の授業の分析項目

- 題名・作者
- 基本設定
- ・時・場所・人
- ・中心人物の検討
- 構成
- ・出来事、事件ごとの要約
- ・起承転結による場面分け
- 表現技法
- ・比喩・色彩語・象徴・対比・繰り返しなど
- 心情の変化
- ・クライマックスの検討
- 主題
- ・作品全体のふりかえり

## 2 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る指導計画(研究内容1)

### (1) 基礎的・基本的な知識・技能の明確化

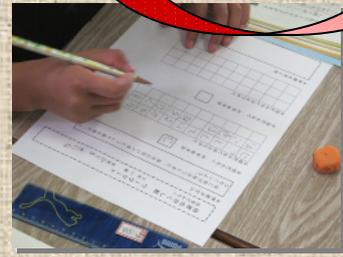
「新学習指導要領解説 小学校国語編」によると、「日常生活に必要な基礎的な国語の能力を身に付けることができるよう、次の改善を図る」とし、日常生活に必要な基礎的な国語の能力を「日常生活に必要とされる対話、記録、報告、要約、説明、感想などの言語活動を行う能力」と述べている。また、中教審教育課程部会の報告では「対話、記録、報告、要約、説明、描写、紹介、討論」などの基礎的な言語活動を行う力を確実に身に付けさせる指導が期待されている。

本校では、ここに例示されている8つの言語活動に新学習指導要領解説にある「感想」と読解指導の基盤となる「音読」を加え、国語科で習得させるべき基礎的・基本的な知識・技能を以下の10の知識・技能と捉えている。

#### 国語科における10の知識・技能！

音読、対話、記録、報告、要約、説明、描写、紹介、討論、感想、の能力

指導計画へ位置付けた「10の知識・技能」の例  
3年説明文「自然のかくし絵」

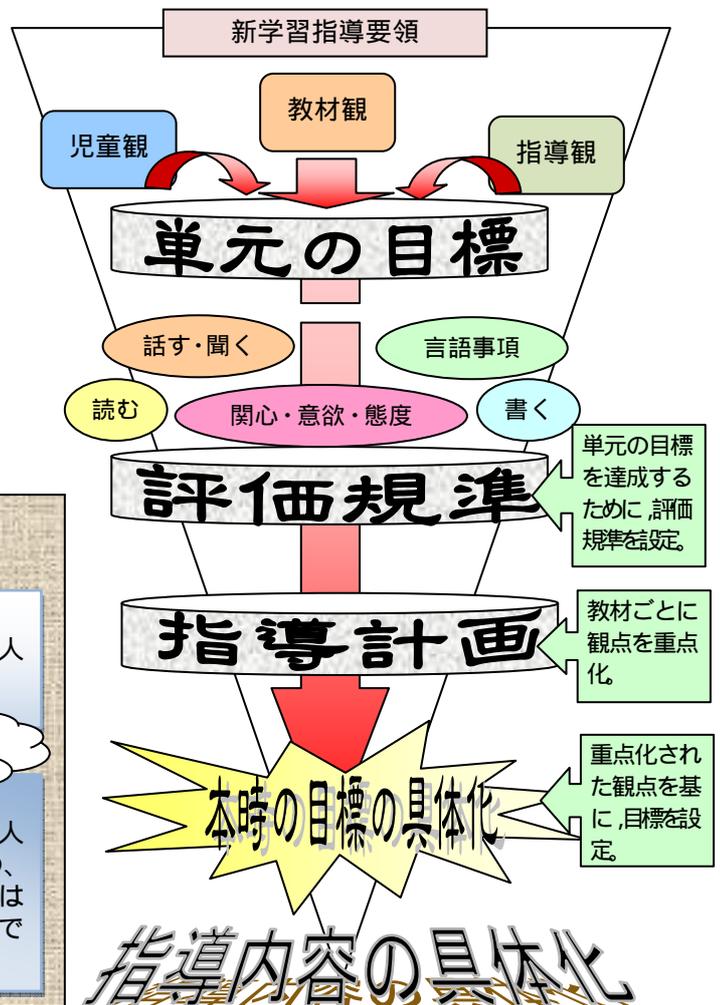
評価規準、評価方法及び10の知識・技能との関連	
読 発言、プリント 保護色のまとめを要約し、筆者が伝えたいことを読み取ることができる。 10の知識・技能 <b>要約</b>	

### (2) 指導目標・指導内容の具体化

子ども一人一人に確かな学力を身に付けていくためには、1単位時間の授業において目標の達成に主眼を置き、授業を展開することが重要である。そのためには、1単位時間ごとの目標（本時の目標）が、より具体化されている必要がある。目標を具体的にすると、目標が達成できたかどうかが明らかになり、目標を達成させるための指導内容も、自ずと明確になる。

本校では、1単位時間ごとの目標をできる限り具体的に表すことで、本時の指導内容の明確化に努めている。さらに、1単位時間ごとの目標と評価規準を関連付けることで、指導と評価の一体化を図っている。

指導目標・指導内容の具体化の手順



#### 指導目標の具体化の例

5年物語文「注文の多い料理店」

#### 本時の目標

・二人の紳士の装いや言動を表す言葉から、二人の紳士の性格を読み取ることができる。

どんな性格？

#### 具体化された目標（例）

・二人の紳士の装いや言動を表す言葉から、二人の紳士が外面は立派な装いをしているものの、内面は強欲で自分勝手な性格であり、紳士とは言えない人物であることを読み取ることができる。

### 3 思考力・判断力・表現力を高める授業展開(研究内容2)

#### (1) 論理的思考を促す学習課題の設定

子どもたちに論理的思考を促し、高めていくためには、学習課題が重要である。本時の目標は、本時の学習課題と関連し、子どもたちが学習課題を解決したということは、本時の目標が達成されたということである。こうした課題解決の過程において、子どもたちの論理的思考は、徐々に高まっていくのである。しかし、学習課題といっても、子どもの実態や授業者の意図、本時の目標によって、様々な表記が考えられる。そこには、子どもたちの多様な考えを引き出させる学習課題や子どもたちから出された考えを集束させる学習課題がある。

本校では、学習課題を「活動呼びかけ型」、「原因追究型」、「意思決定型」、「行動目標型」の4つの型に分類し、子どもの実態や指導内容に応じて適切に設定している。

学習課題の類型	学習課題の特徴
活動呼びかけ型 「～しよう。」	子どもたちに学習活動を促す学習課題。学習課題に対する本時のまとめが、比較的緩やかな範囲になる。そのため多様な考えが出されやすい。
原因追究型 「なぜ、～なのか。」	子どもたちに答えを直接求める学習課題。学習課題に対する答えは、限定され、子どもたちの考えが よりも集束されやすい。
意思決定型 「～なのは、～だからか。」	子どもたちに答えを二者択一で選択させる学習課題。学習課題に対する答えは、 よりも限定され、どちらが正しいのか討論になりやすい。
行動目標型 「～をノートにまとめよう。」 「～を～に説明しよう。」	子どもたちに、課題達成への行動目標を示す学習課題。子どもたちにとっては、何をすれば学習課題を達成できるのかが分かりやすい。 やの学習課題に付け加えて設定することもできる。

#### (2) 集団思考の焦点化・深化を促す発問の工夫

目標の達成を目指して設定された学習課題を解決するためには、教師の発問が重要である。本時の学習課題が「活動呼びかけ型」のように、子どもたちから多様な考えが出される場合は、様々な考えを焦点化させる発問が必要である。また、本時の学習課題が、「原因追究型」や「意思決定型」のように、少数の考えが対立したり、似たような考えが出されたりする場合は、子どもたちの考えをより深化させる発問が必要である。

本校では、本時の目標と学習課題から、課題解決に迫る主発問を見出し、発表・交流の中で集団思考の焦点化・深化を促すことで課題解決を図り、目標の達成を目指している。

子どもたちの考えを焦点化させる発問の例  
5年物語文「注文の多い料理店」

外見のことばかり気にしている。

動物の命を何とも思わない。

二人の紳士は、獺のベテランですが、それとも初心者ですか。

「～だろうね。」と言っているから、初心者だと思う。

紳士の人物像を焦点化

子どもたちの考えを深化させる発問の例  
1年物語文「おおきなかぶ」

すごくあまくて、すごく大きなかぶになってほしいと思っているよ。

このかぶは、すぐに来たのでしょうか。

すぐには食べられないよ。きっとおじいさんが、お世話したんだよ。

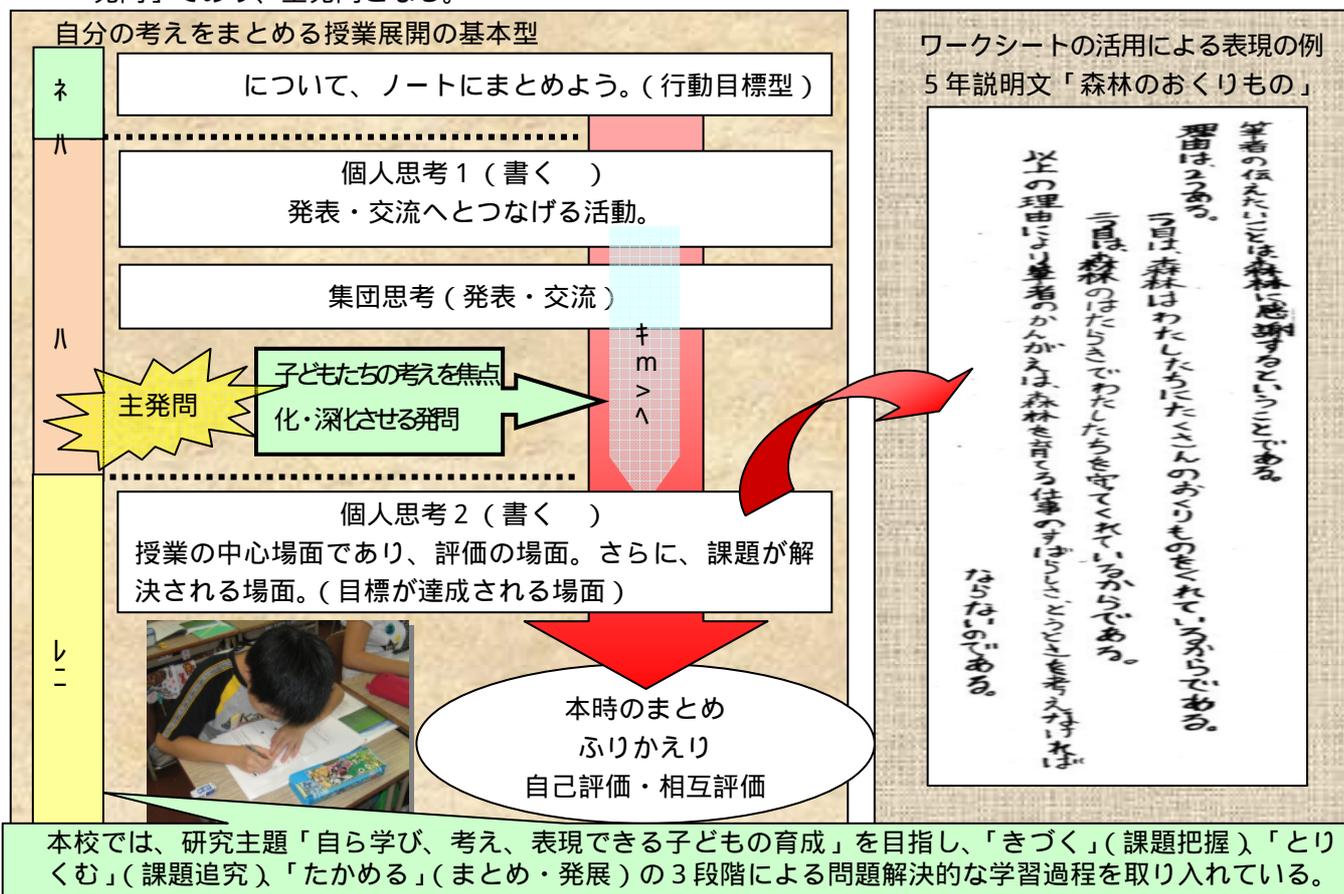
おじいさんのかぶに対する思いを深化

### (3) 一人一人の考えを表現する場の工夫

子ども一人一人の考えを表現する場としては、自分の考えをノートやワークシートなどにまとめる、個人による表現の場（個人思考）と一人一人が考えた意見を互いに発表・交流し合う、集団における表現の場（集団思考）の二つが考えられる。課題解決に向けて思考し、追究したことを自分の言葉で表現することは、非常に重要である。さらに、子ども自身が考えたことを交流し合うことで、自分の考えを変容させたり、深化させたりすることができる。本年度は、「行動目標型」の学習課題と連動させることで、個人思考の中心を集団思考の後に設定し、子ども一人一人が発表・交流で得た情報を基に、自分の考えをまとめる授業展開を新たに取り入れた。（☞自分の考えをまとめる授業展開の基本型）

本時の学習課題に「ノートにまとめる」という行動目標が入ると、「発表・交流で得た情報を基に自分の考えを書く」ということが、授業の中心となる。「発表・交流で得た情報を基に自分の考えを書く」ということは、筋道立てて自分の考えをまとめることであり、論理的思考を促すことにつながる。さらにこの場面は、発表・交流を経ている分、「書く」よりも、子どもたちの思考が深まっている。

また、学習課題を解決できたかどうか評価する場面も、この「書く」となる。この場面は書いたものを評価することができ、課題解決の達成状況を明確に把握することができる。さらに、「書く」から発表・交流を経て、どのように変容したのかを見取することもできる。しかし、子どもたちが自分の考えを書くためには、発表・交流の中で、ある程度自分の考えを整理することが必要である。そのためには、子どもたちに自分の考えを書かせる前の発問が重要である。それが、「焦点化・深化させる発問」であり、主発問となる。



本校では、研究主題「自ら学び、考え、表現できる子どもの育成」を目指し、「きづく」（課題把握）「とりくむ」（課題追究）「たかめる」（まとめ・発展）の3段階による問題解決的な学習過程を取り入れている。

#### 実践の成果と課題

教材分析を行ったことにより、教材の特性に応じた指導計画の工夫が図られ、授業改善に生かすことができた。

目標と課題、主発問を関連させたことで目標の達成が明確になり、指導内容に応じた学習課題や課題解決に迫るための主発問を意識しながら、授業を展開することができた。

自分の考えを書く場面を授業の中心に据えたことで、子どもたちの論理的思考力が高まり、言葉を根拠に自分の考えを表現する力をはぐくむことができた。

子どもたちの論理的思考の深化を図るためには、各学年の発達段階に応じて、自分の考えを論理的に書く活動を系統的に指導計画に位置付けることが必要である。